

福岡県 南蔵院(なんぞういん)

林覚乗(はやしかくじょう) 和尚の心に響く言葉より…

ある若い看護婦さんが、幼い子供を持つお母さんが乳ガンで亡くなった場面に立会い、涙が止まらなくなり、その後仕事が全く手につかなくなってしまうたんです。

「私は看護婦として、失格でしょうか？」と彼女は、私に聞きました。

私は「そのときに涙を流さない人は、看護婦になってはいけません。」

その時に涙を流す心を持った人に、病人は看護してもらいたいです」と答えました。

ある東京の病院に、老婦人が入院していました。既に、末期ガンでした。

死の一週間ほど前から、老婦人はしきりに天気予報を気にし始めました。その理由を総婦長が尋ねますと「運動会があるからです」という返事でした。

老婦人には、小学校に入ったばかりの孫がいます。つい先日、お母さんに連れられて見舞いに来て、学校のことをひとしきりしゃべっていました。

運動会の練習がはじまったこと、かけっこが得意なこと、勉強はともかく、かけっこなら一番になれるかもしれないと自慢していました。

そして「おばあちゃん、雨は降らないよね」と、念を押して帰ったのです。

その話を聞くと、総婦長は八十人の看護婦さん全員に呼びかけました。

「おばあちゃんの願いが通じるよう、みんなであつて坊主をつくってあげよう。病室を一杯にして、おばあちゃんの気持ちを叶えてもらおう」

看護婦さんたちは、さっそくひとり一個ずつあつて坊主をつくって持ち寄り、ベットの隅から窓の外まで一杯につるしました。

老婦人はうれしそうに、あつて坊主たちを眺めていましたが、病状は日増しに悪化、かわいい孫の運動会の日を待ちきれずに、この世を去りました。

臨終の際、老婦人は看護婦さんたちの真心こもったプレゼントに

「あ・り・が・と・う」といつかのよう、目をつなずながら別れを告げたそうです。

北海道新聞の切り抜きに、ある中年男性の投書がありました。

終電車の発車間際に切符なしで飛び乗り、車掌さんが回ってきた時に、切符を買おうと財布を出そうとしたが、財布がなかった。小銭入れもない。どこかで落としたのだから。途方にくれたけれども、そのことを正直に車掌さんに言いました。

「すみません。明日、必ず営業所まで行きますから、今日は乗せてください」

ところが、この車掌さん、よほど虫の居所が悪かったのかどうか、許してくれない。次の駅で降りろ、と言つのです。

次の駅で降りても家に帰る手段はない。ホームで寝るには、北海道の夜は寒すぎる。どうしようもなく困っていたら、横に座っていた同じ年格好の中年の男性が回数券をくれたんです。

お礼をしたいからと言つて、その男性に名前や住所をたずねたけど、ニコニコ手を振って教えてくれない。最後は借りたことを忘れて、なぜ教えてくれないのかと文句を言つたら、次のような話をしてくれました。

「実は私もあなたと同じ目にあつて、そばにいた女子高校生にお金を出してもらつたんです。その子の名前を何とか聞きだそうとしたけど教えてくれない。」

「おじさん、それは私のお小遣いだから返してくれなくて結構です。それより、今おじさんがお礼だといって私に返したら、私とおじさんだけの親切のやり取りになってしまう。もし、私に返す気があつたら、同じように困つた人を見かけたならその人を助けてあげてください。そしたら、私の一つの親切がずっと輪になって北海道中に広がります。そうするのが、私は一番うれいんです。そうするようになって私、父や母にいつも言われてるんです。」

と私に話してくれました。

新聞記事に載つていた話です。

主婦 A 子さん(二十九)の夫は、機械リース会社に勤務するごく普通のサラリーマンだったので、あるとき商品相場に手を出し会社や金融業者から借りたお金が約2000万円。これに、家のローンや勝負ごとの負けも加わつてついにマイカーごと蒸発。その日以来、A さんは毎日夕方になると三歳の長女を連れて自宅近くの陸橋へ出かけるのが日課になりました。毎日、毎日、きょうこそ夫が帰ってくるのではないかと期待を胸に陸橋の上にたたずむ日が続きました。

しかし、一ヶ月が過ぎても夫は帰らず、連絡すらありません。借金の督促は厳しく、帰るあてのない夫を待つことに疲れ果てた A さんは、何度も死ぬことを考えたといひます。

そんな四月の雨の日、一台の車が陸橋の下で止まり、A さんと同じ年格好の女性が降りてきて、二人に声をかけました。「間違つたらごめんなさい。いつもそこにいるけど、身投げなんかしないでね」この女性は日頃、陸橋の下を通り二人を見ていたんですね。A さんは、思わず心の中を見すかさされたような気持ちになりました。A さんが返す言葉もありません。その女性は小銭入れを渡したそうです。中には小さく折つた一万円札が二枚とメモ用紙が入っていました。

(いつも気になつて、あなたのことを見ていました。人生って死んで何もかも終わりでと思うけど、お子さんだけは道連れにしないでね)と記されています。さらにもう一つ、小さな力エルのマスケットが入っていました。A さんには、この力エルが「帰る」という言葉に結びつき何かの暗示のように思われ、その場で娘を抱きしめながら、あふれる涙を抑えることができなかつたそうです。

「勇気がわいてきて、立ち直れそうな気持ちになりました。その後、北陸の旧家の A さんの実家では夫と縁を切るという条件でお金の始末をつけてくれることになり、A さんも里帰りして出直すことになりました。

立ち直つた A さんはその姿を見てもらおうと何度か陸橋に出かけたのですが、なぜかあの女性の車は通らなかつたそうです。A さんが命の恩人を探している、ということだ新聞の記事は締めくくられています。

「立ち直つた A さんはその姿を見てもらおうと何度か陸橋に出かけたのですが、なぜかあの女性の車は通らなかつたそうです。A さんが命の恩人を探している、ということだ新聞の記事は締めくくられています。」

林覚乗和尚のお話 おわり
読売新聞の投書欄でもステキな投稿に出会いました。こちらです。

『母子手帳に感動』

大学生 小柳陽太郎 21(東京都八王子市)

献血の際に診てもらつた医師の勧めで、母子手帳を母親と一緒に読んだ。妊娠中から出産直後までの自分の様子や健康状態がつぶさに書かれていた。生まれる前から母親が自分を愛してくれていたことに不思議な感覚を覚え、同時に感謝の念が生まれた。その医師は「自分がいかに愛されて生まれてきたのかを知り、自分の存在意義を考えてほしい」と語っていた。

最近、就職活動の中で自分のよりどころを見失いつつあつた。親の支えがあつてこそ今の自分がある。人生は自分のためだけにあるのではないということに気づいた。

うちは共働きで、二人の子とも、生後半年もしないうちに保育園にお世話になりました。いつだったか、その保育園の連絡帳を子どもたちと一緒に見て盛り上がったことを思い出しました。風邪気味でも無理して連れて行つて、その後大丈夫かと、仕事でも心配したり、どんな様子だったか、迎えに行つて、先生からのお話や連絡帳への書き込みで安心したり…

自分もよく預けに連れて行つたのですが、下の子が出来た時、長男が「赤ちゃん返り」して、大泣きしたまま、後ろ髪を引かれつつ無理矢理渡してきたことなど…懐かしく思い出しました。

この素晴らしい投稿の大学生のように、何かの折りに、親子で大切な思いを共有する機会を持ちたいものです。

「誰も優しい言葉をかけてほしい」

「マザー・テレサの、この言葉はご存知ですか。『愛の反対は憎しみではない。それは無関心である。』」

誰だつて自分の存在を無視されるのは辛いもの。嫌われても憎まれても、自分の存在が認められている分、まだましなのです。では、相手に「私はあなたに関心を持っていますよ」ということを伝えるにはどうしたらいいのでしょうか。

答えは簡単です。相手に言葉で伝えること。優しい言葉で伝えてあげることです。ある100歳のおばあちゃんの言葉です。「お金もいらぬ。着物もいらぬ。命だつてもういらぬ。」

でもお願い。優しい言葉をかけてほしい。100年生きてきて、最後に彼女が欲しかったものは優しい言葉だったので。それなら100年も待たないで、今日から周りの人に優しい言葉をかけてみませんか。

「あなたに会いたくて来たよ」
「あなたと過ごせて、とても嬉しい」
「あなたといると、とても楽しい」
「あなたで、本当によかつた」
「すべてあなたのおかげです」
「本当にいいお仕事、していますね」
「うわあ、すごい、よくできたね」
「どうすれば、あなたのようにになれるかな」
「嬉しい。でも頑張りすぎないでよね」
「すごく美味しい。おかわり!」
「どれも何気ない一言ばかりです。それで相手の気持ちが癒されるのなら、どんどん口にしたいですね。そしてつとつとつと、それを言っている自分自身が、実はほとんど輝いてくるのです。優しさという心の筋肉が、強く大きくなっていくからなのでしょうが。」

出典元、「また、あなたと仕事したい!」
とされる人の習慣(高野登・志賀内康弘)

「与えたものは必ず自分に返ってくる。良いことも悪いことも。」
とあります。意識して良い言葉の習慣、目の前の人を笑顔にする優しい言葉がけの習慣を。幸せのコツは実は簡単なのかもしれませんね。

青春出版社